

守山区金屋遺跡について

● 川添和暁・鬼頭 剛

本稿では、名古屋市守山区金屋遺跡の資料紹介を行なう。正式な発掘調査は行われていないが、遺跡確認調査の結果、古代・中世の集落跡である可能性を提示した。守山区ではこれまで台地上でしか遺跡の確認ができていなかった。今回、庄内川・矢田川に挟まれた沖積地内の微高地上に立地する本遺跡を確認したことにより、古墳時代以降の地域史研究に新たな考古学的知見を加えることとなった。

はじめに

本稿は、名古屋市守山区金屋遺跡の資料紹介である。遺跡発見などの経緯は、以下に述べる通りであるが、近い将来に調査の予定はないと考えられる。今回行なった確認調査は体制が不十分ではあったものの、遺跡の立地など、当地域の古墳時代以降の地域史を考える上で極めて重要と考え、ここに成果を掲載するものである。

遺跡の発見の経緯および遺跡・遺物の報告は川添が行なう。併せてこの遺跡では、地質調査をも行っている。その成果をもとに、地質学的な見解については鬼頭が行なった。

金屋遺跡の立地と環境

遺跡は、名古屋市守山区金屋一丁目地内に所在する(図1)。付近は熟田層に相当する守山面(中位段丘)が東から西側に向って傾斜する場所にあたり、遺跡はより西側、段丘下の沖積地に形成された微高地上に立地する。遺跡の立地する地番の標高は現況で約11.5mである。当地は、旧来より畑地であったものの、戦後の区画整理および昭和30年代以降の宅地化により、周辺の景観が急変したようである。

周囲には、縄文時代以降の遺跡の分布が認められる(図2)。庄内川を挟んだ約4.5km北側には、縄文時代中期の土器などが出土した町田遺跡がある。守山面には、縄文時代晩期の土器棺墓・土坑墓・竪穴建物跡および多量の遺物

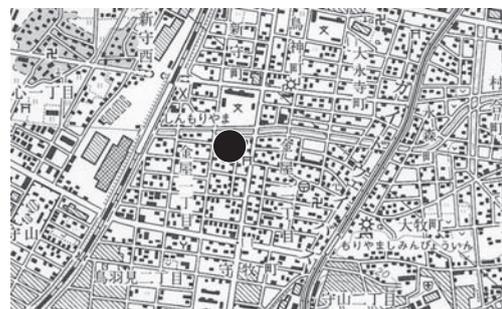


図1 金屋遺跡の位置
(国土地理院2万5千分の地形図「名古屋北部」より)

を含む包含層が見つかった牛牧遺跡が、西へ約3km行った段丘端部にある。さらに北東へ約5kmの同じ丘陵上には、弥生前期の土器棺墓が見つかった、川東山遺跡がある。また、弥生時代の遺跡としては、同じ丘陵上に西城遺跡、庄内川の対岸には松河戸遺跡、矢田川の対岸には長母寺遺跡がある。古墳時代の遺跡としては、守山面上には守山白山古墳が認められ、庄内川対岸にも二子山古墳など古墳群の群集が認められる。また、古代以降の遺跡としては、小幡廃寺や勝川廃寺があり、さらに中世の遺跡としては、矢田川を挟んだ南東の丘陵部に、H-G-5 窯跡をはじめ、山茶碗類窯跡群が存在している。

これらの遺跡の大多数は、丘陵上に立地しており、沖積部に遺跡の範囲が確認できる遺跡としては、庄内川北側の松河戸遺跡、矢田川南側の大幸町遺跡、そして今回報告する金屋遺跡である。特に、庄内川・矢田川に挟まれた地域では、初めての遺跡確認となり、その存在意義は大きい。

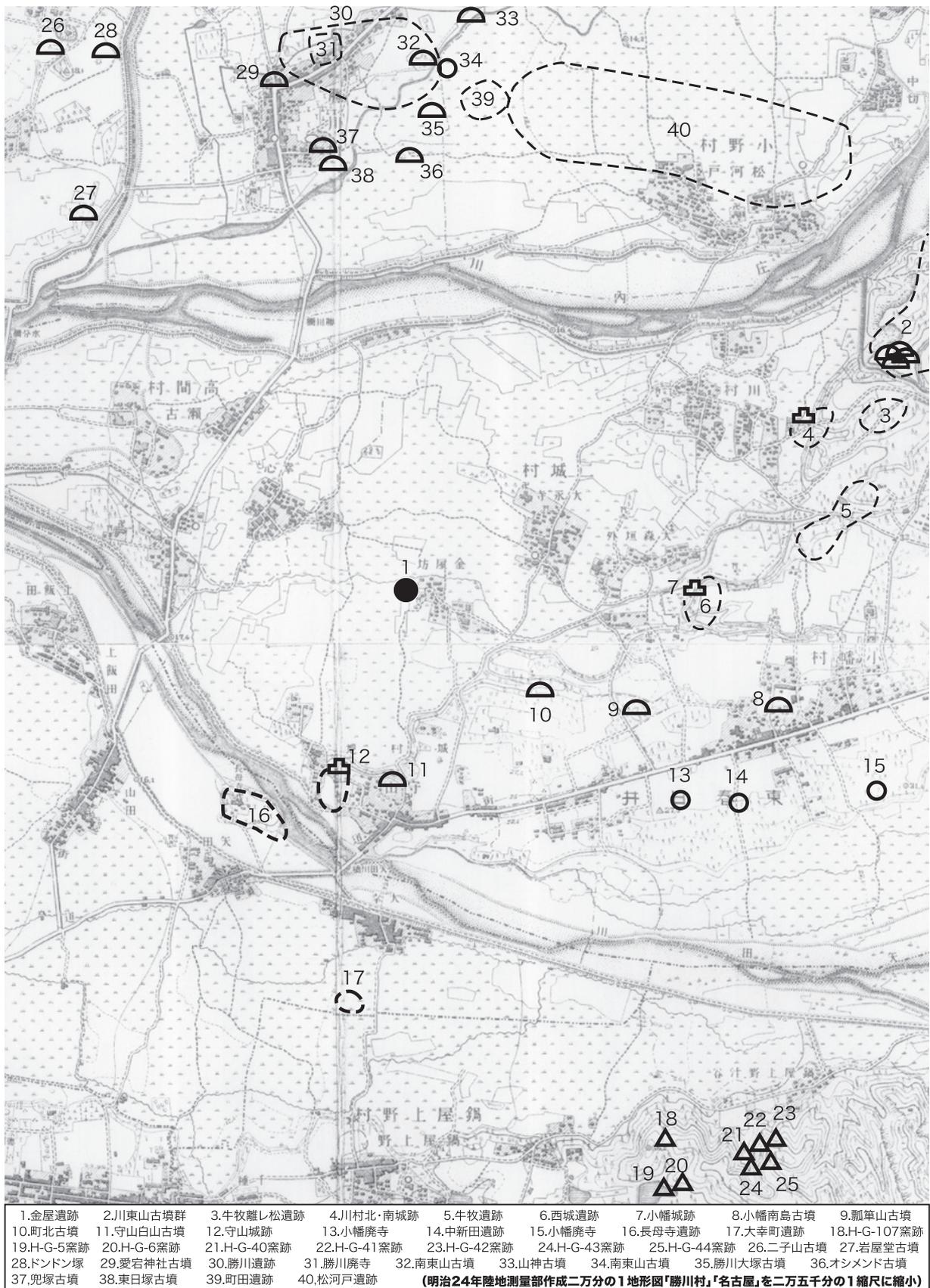


図2 金屋遺跡および周辺の遺跡位置図

遺跡発見の経緯と経過

遺跡周辺はJR中央本線と、大曽根駅からのガイドウェイバス路線の中間に位置しており、住宅街の中に位置する。しかし、所々現在も開発が及んでいない場所が点的に認められるのも、当地域周辺の状況であり、金屋遺跡もそのような場所から見つかった。

筆者が当地を初めて訪れたのは、平成22(2010)年の2月である。当地は畑地で、果樹などの樹木も多く茂っていたということであったが、来跡時には、樹木も伐採されており、開けた状態になっていた。地表には、畑の畝などに陶器・土師器細片が多数散乱しているのを観察することができた。

当地は、農地の生産緑地指定解除に伴い、一部開発の予定が立てられていた。当地には、これまで遺跡所在の登録がないため、まず表面から採集された遺物の状況が果たして遺跡の存在によるものかの確認を行なう必要があった。ここで、土地の所有者である服部ますみ氏に相談の上、より詳細な調査を行なう了解を得て、生産緑地指定が解除された以降の4月11日と18日の両日に調査を実施した。

調査の詳細な結果は次章に述べるが、遺構な

どの検出により、遺跡の存在が明らかとなった。5月18日に名古屋市教育委員会文化財保護室の伊藤正人氏にご来跡頂き、新規発見遺跡の確認がなされた。その後、名古屋市教育委員会から平成22年8月11日付で、金屋遺跡の愛知県埋蔵文化財包蔵地台帳への新規記載協議が行なわれ、県教育委員会からは8月23日付で名古屋市教育委員会あてに新規記載した旨の通知が出た。

開発行為は、個人住宅の建築に伴うものである。基礎部分の土盛りと杭方向の導入による工法変更により遺跡の保護を図ることを条件に、文化財保護法第93条第1項に基づく届出に対して、基礎工事時などには立会調査を行うこととなった。文書は、名古屋市教育委員会から「22教文第2-78号」で、平成22年9月2日付けの通知文が出された。

また、9月にはボーリングによる地質調査が行われた。

調査概要

9月の立会では、包含層までの掘削が進行していないことの確認と、遺物の採集が行なわれたのみである。ここでは4月の調査の概要について報告する。

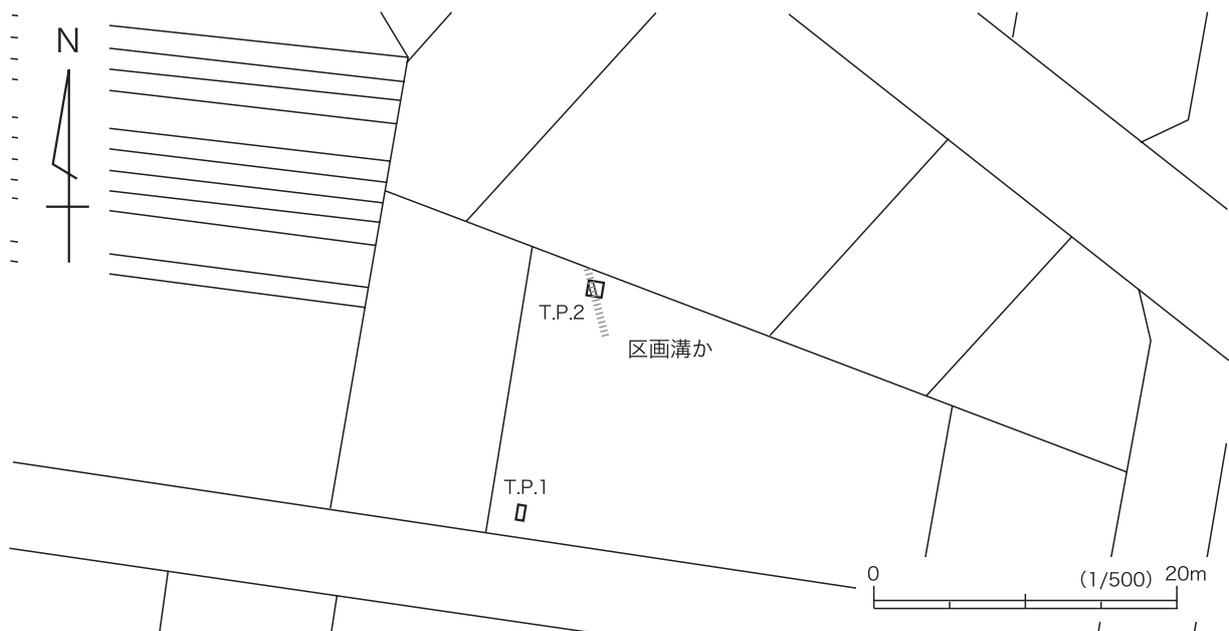


図3 金屋遺跡調査区設定図

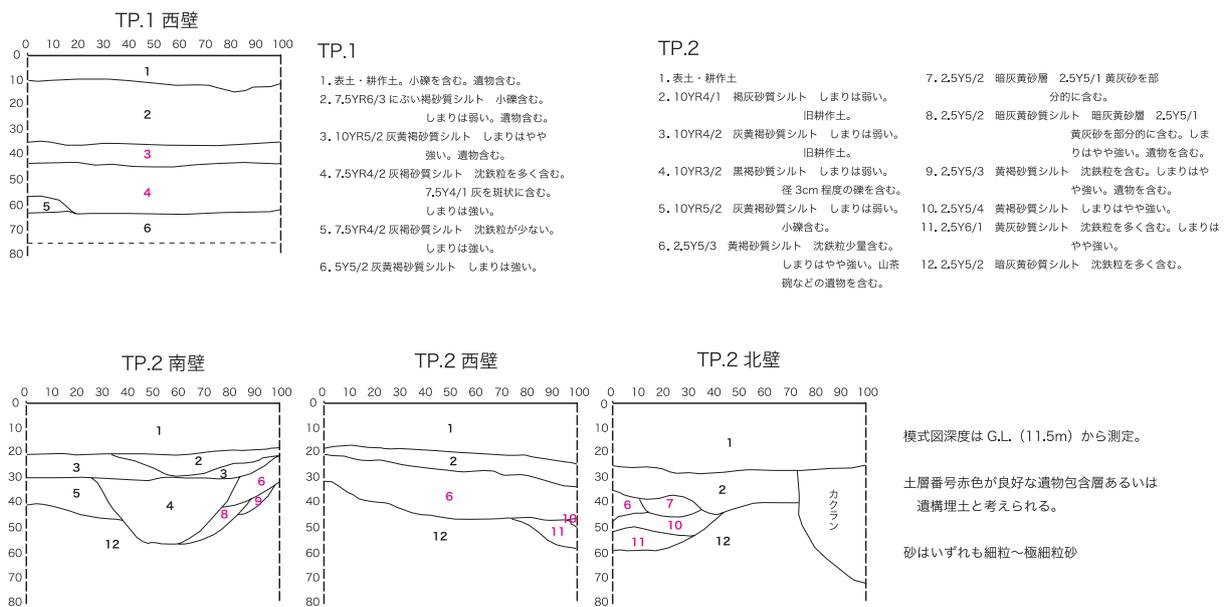


図4 金屋遺跡調査区層序模式図 (1/30)

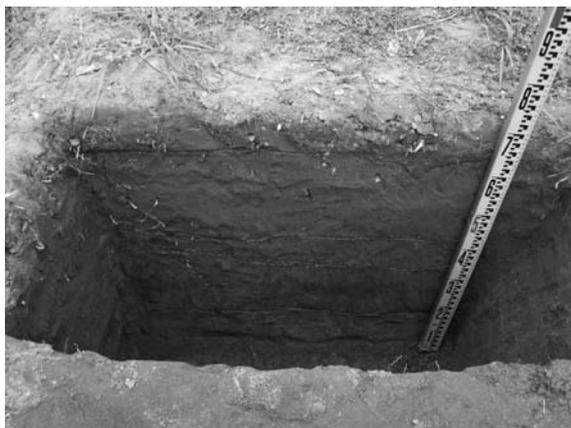


写真1 T.P.1 西壁 (東より)

調査は、対象地域内に、2ヶ所の試掘坑を設定して行なった。試掘坑の設定には、後世の攪乱などが認められる地点を利用した。開発行為が行なわれる予定の西側を中心に行ない、市道に面する南側をT.P.1(0.5×1m)、北側をT.P.2(1×1m)と呼称・設定した。調査区平面を図3に、土層堆積状況などを図4に示す。

T.P.1では、地表から約35cmにわたる表土および耕作土の下に、約30cmの堆積で、遺物包含層を確認することができた。地表下65cmのレベルで、しまりの強い無遺物層に達した。以上の堆積はほぼ水平堆積を呈している。T.P.1からは図5の1と4が出土した。

T.P.2では、地表から30～40cmの表土および耕作土の下に、約20cmの堆積で遺物包含



写真2 T.P. 南壁 (北より)

層を確認できた。この土を埋土とする、北西—南東方向の溝を検出することができ、検出レベルからの深さは約35cm、断面形状U字状を呈するものである。T.P.2の8層からは、図5の2が出土した。

出土遺物

筆者は、須恵器片16点、山茶碗など中世陶器片21点、土師器片27点、播鉢など近世陶器片9点、土製品1点、石器1点を採集した。また、名古屋市教育委員会の方でも須恵器10片・山茶碗20点ほど採集されている。多くは細片となっているものの、筆者が採集した遺物のうち、図化可能な資料のみを7点提示する。

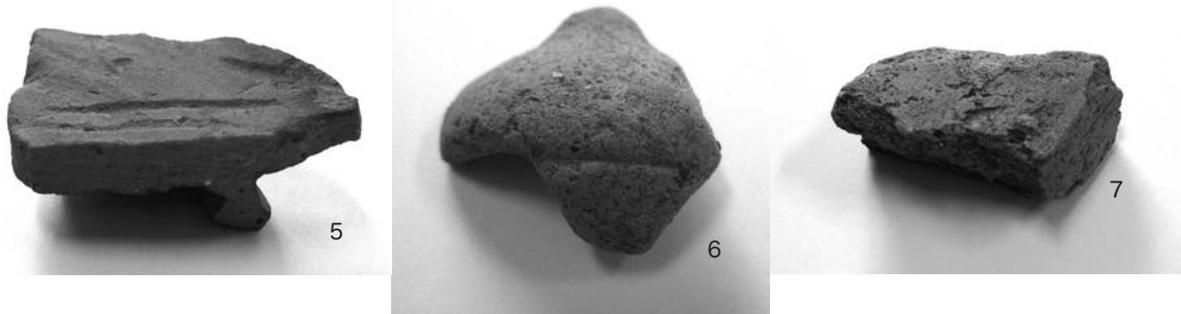
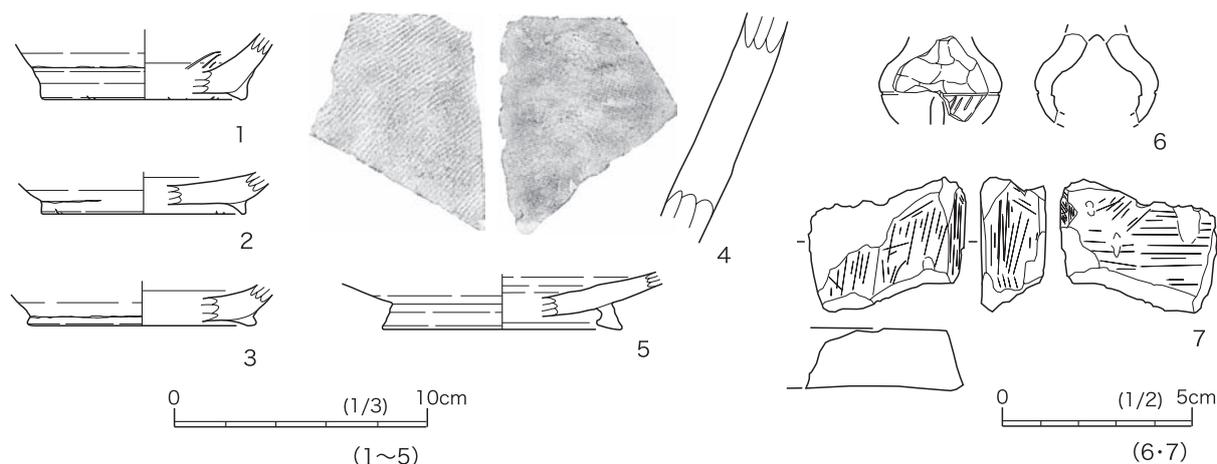


図5 金屋遺跡出土遺物

図5の1～3は中世山茶碗類の碗底部である。1・2は底部にモミ圧痕が若干認められる程度であり、3の底部には認められない。1の内面には卸目とも考えられる櫛描状の痕跡が確認できる。4・5は古代須恵器。4は大甕胴部片である。5は椀あるいは盤の底部で折戸10号窯式に属するものと考えられる。6は土鈴と考えられる。胴部横方向に細い沈線が巡り、その下部には斜方向の連続沈線が施されているものである。7は砥石で、断面形状が直方体を呈しており、表面には他方向に擦痕が認められるものである。砂質凝灰岩製。

若干の考察

T.P.2で確認できた溝は、掘り方が安定しており、埋土から山茶碗が出土したことから、遺構中世期には集落が形成されていたと考えてよいであろう。但し、出土遺物で見たように、この金屋遺跡では、古代の須恵器・灰釉陶器片も数多く採集されており、今回、遺構の検

出はできなかったものの、古代においても集落跡など、人為的活動の場であったことは想定してよいであろう。特に土鈴の出土は、遺跡の性格を考える上で興味深い。今回の資料のみでは、古代・中世ともに、当時の集落景観の復元には到底及ばない情報量でしかないが、古代以降の沖積地への活動の活発さを語るには充分であると考えている。

問題は、この沖積地上の微高地がいつの段階で形成されたのかである。この点を含めて、地質学的な所見を以下に記す。(川添和暁)

金屋遺跡におけるボーリングコアの層序記載

掘削調査は名古屋市守山区金屋において、2010年(平成22年)に兼松日産農林株式会社(現場:村田 誠、報告書:飯岡 浩)により地表面の標高11.50mから標準貫入試験併用で実施されたものである。主な地層から層厚30cmごとに土質標本として管ビンに入れられている。その管ビンの試料を用いて堆積物の観

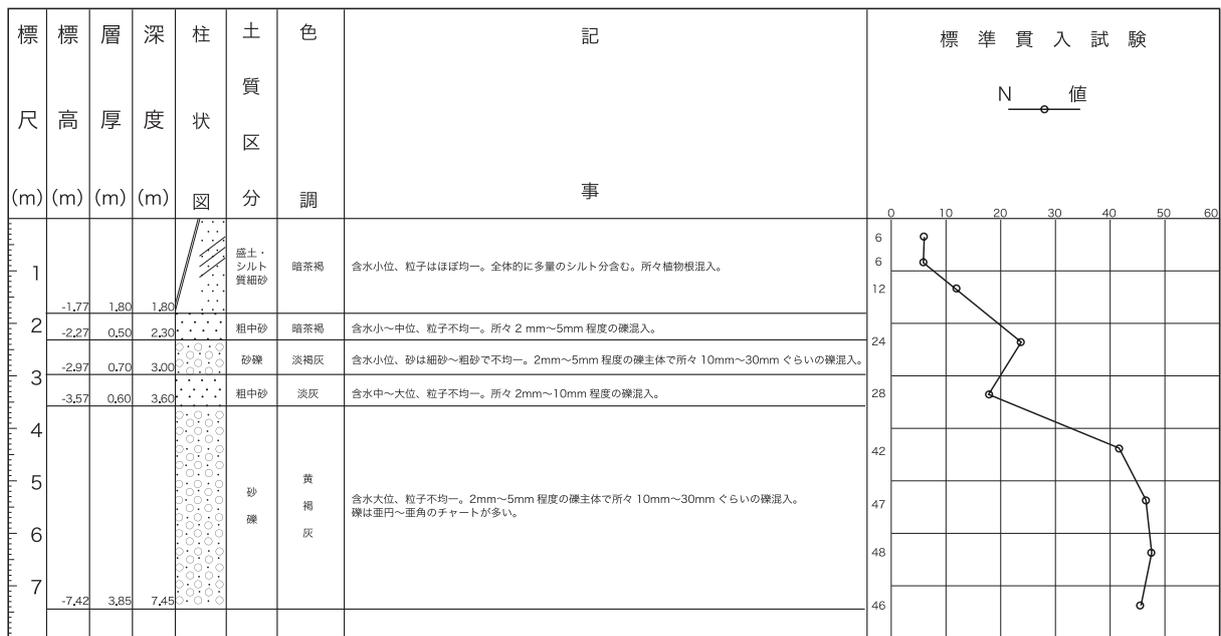


図6 金屋遺跡ボーリング柱状図

察と試料の採取を行なった。なお、掘削はオールコアではないため、層序区分にあたってボーリング柱状図を参考にした(図6)。下位層の試料から順に記載する。分析に供した試料の試料番号は便宜的に下位層のものから若い番号をつけた。

標高 4.05 ～ 7.90m は層厚約 3.9m の中礫層である。基質にシルトを含み、地層は全体ににぶい黄色 (2.5Y6/4: マンセルの表記。標準土色帖を使用。以下同じ)、明黄褐色 (2.5Y6/6)、黄褐色 (2.5Y5/3) と、全体に黄色を帯びている。平均粒径が 10mm 程度の角礫～亜角礫層で、最大礫径は 30mm のものがみられる。基質の量は少なく礫支持礫層である。礫種としてチャート、濃飛流紋岩や石英粒子がみられる。含水量は多い。本層から試料 1 (標高 4.05 ～ 4.35m (深度 7.45 ～ 7.15m))、試料 2 (標高 5.05 ～ 5.35m (深度 6.45 ～ 6.15m))、試料 3 (標高 6.05 ～ 6.35m (深度 5.45 ～ 5.15m))、試料 4 (標高 7.05 ～ 7.35m (深度 4.45 ～ 4.15m)) の 4 つの管ピン試料が採取されている。

標高 7.90 ～ 8.50m は暗灰黄色 (2.5Y5/2) の粗粒砂～中粒砂層からなる。礫径 2 ～ 10mm の礫を含み、最大礫径 20mm のものもみられた。砂層の淘汰はあまり良くなく、含ま

れる礫には角礫や亜角礫が多い。礫種としてチャート、濃飛流紋岩や石英粒子がみられる。含水量は多い。本層からは試料 5 (標高 8.05 ～ 8.35 (深度 3.45 ～ 3.15m)) の管ピン試料が採取されている。

標高 8.50 ～ 9.20m は暗灰黄色 (2.5Y5/2) の中礫層である。基質にシルトや極粗粒砂や中粒砂を含む角礫～亜角礫からなる。標高 9.20 ～ 9.70m はにぶい黄褐色 (10YR4/3) の極粗粒砂～中粒砂層である。本層から地層中の含水量が減少し、全体に乾燥が進んでいる。最大礫径 15mm の角礫もみられた。本層とその直下の地層を、地層境界を含めて標高 9.05 ～ 9.35m (深度 2.45 ～ 2.15m) から一括された管ピン試料が採取されている (試料 6)。

標高 9.70 ～ 11.50m はにぶい黄褐色 (10YR4/3 ないし 10YR5/3) のシルト質細粒砂層からなる。全体にシルト成分が多く、淘汰は不良である。礫は含まれず、塊状である。本層上部には石英や長石の堆積粒子に混じり、植物片がみられる。本層の頂部が現在の地表面となる。本層からは試料 7 (標高 10.05 ～ 10.35m (深度 1.45 ～ 1.15m))、試料 8 (標高 10.55 ～ 10.85m (深度 0.95 ～ 0.65m))、試料 9 (標高 11.05 ～ 11.35m (深度 0.45 ～ 0.15m)) の 3 つの管ピン試料が採取されている。金屋遺跡で

は地表から標高 10.9～11.2m（深度 0.60～0.30m）が遺物包含層であるとの調査結果である（図 4）。この所見からすると、試料 9 が遺物包含層に関する試料となる。金屋遺跡の地下層序は中礫層と砂層との互層の上をシルト質細粒砂層が覆うという上方細粒化傾向を示しており、管ピン試料として合計 9 試料が採取された。

火山灰分析の分析結果

ボーリングコア掘削により採取された管ピン試料を用いて、地下層序の堆積年代を得るために火山灰分析を行なった。火山ガラスの抽出と屈折率の測定は株式会社古澤地質の古澤明氏にご協力いただいた。今回は定性分析の結果のみを示す。

火山灰分析の試料は洗浄・篩別して極細粒砂サイズ（1/16～1/8mm）に粒度を調整し、火山ガラスの含有率と屈折率を測定した。屈折率は温度変化型測定装置 MAIOT（古澤，1995）を使用した。

9 試料のうち、最も下位にある標高 4.05～7.90m の中礫層の最下部から採取された試料 1（標高 4.05～4.35m（深度 7.45～7.15m））には火山ガラスがまったく含まれていなかったが、それ以外（試料 2～9）のすべての試料から火山ガラスが確認された。すべての試料において検出される火山ガラスの量は計数 3000 粒子中に 10 数個程度と少ないものの、地表に近い深度約 1.5m 付近で採取された試料 7（標高 10.05～10.35m（深度 1.45～1.15m））には火山ガラス含有率のスパイクが認められた。検出された火山ガラスの屈折率には 1.494-1.499、1.500-1.507、1.510-1.516 のものがあった。ガラスの付着した角閃石も見られた。試料 7 よりも下位層から採取された試料にも火山ガラスが少量ではあるが含まれていた。標高 4.05～7.90m の中礫層から採取された試料 2（標高 5.05～5.35m（深度 6.45～6.15m））、試料 3（標高 6.05～6.35m（深度 5.45～5.15m））、試料 4（標高 7.05～7.35m（深度 4.45～4.15m））と、標高 7.90～8.50m の粗粒砂～中粒砂層から採取された試料 5（標高 8.05～8.35（深度 3.45～3.15m））からは

1.495-1.508 の範囲の広い屈折率をもつ火山ガラスが検出された。

測定された火山ガラスの屈折率から推定すると、試料 7（標高 10.05～10.35m（深度 1.45～1.15m））の 1.500-1.507 の値は大山笹ヶ平火山灰（DSs）および大山東大山（DHg）からなる大山火山より噴出した火山灰に対比されるが、それぞれの詳細が不明であるため、今回は大山ホーキ火山灰として一括した。なお、それらの噴出年代は約 2 万 4 千年前の噴出年代をもつ始良 Tn 火山灰（AT）（村山ほか，1993）の降灰直後と推定されている。1.494-1.499 と 1.500-1.507 の値の一部が約 3000 年前の噴出年代の伊豆カワゴ平火山灰（Kg）（町田ほか，1992；西田ほか，1993）にあたる。同じ層準（試料 7）から新旧の異なった火山ガラスが検出されたが、古い年代を示す火山灰は上流からの二次的な混入とも考えられるため、新しい年代の火山灰を考慮すれば、金屋遺跡の地下層序の上部は伊豆カワゴ平テフラ（Kg）の降灰時期を示す縄文時代晩期以降に堆積したものである。なお、試料 2～5 の火山ガラスのもつ 1.495-1.508 という値は屈折率の範囲が広すぎて給源火山を特定できない。

金屋遺跡の地形・地質環境の検討

庄内川・矢田川流域における名古屋市の地下地質は、全体に砂層や礫層と粘土層との互層からなり、下位層より東海層群（第三紀）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）の第三系～第四系の堆積物から構成される。地形分布は丘陵地～高位段丘が中部更新統、中位・低位段丘が上部更新統、沖積低地は上部更新統最上部～完新統からなる。金屋遺跡の調査地点から南へ約 0.6km には守山城跡、南東約 0.8km に町北古墳、同じく南東約 1.2km に瓢箪山古墳などの遺跡が知られており、上部更新統の熱田層からなる守山台地の北方縁辺に並んでいる。金屋遺跡の調査地点は台地の縁辺近傍の沖積低地にあたる。ところで、同じ庄内川・矢田川流域の沖積低地にある遺跡で、金屋遺跡から約 4.5km

西の矢田川左岸にある志賀公園遺跡では、標高 1.92m の黒色粘土層の土壌試料が 2945、2935、2925 cal yrs BP(PLD-2330) の年代値を示し、縄文時代晩期頃には氾濫原であったことがわかっている(鬼頭, 2004)。金屋遺跡の火山灰分析でも縄文時代晩期頃の伊豆カワゴ平火山灰(Kg)が検出されたことにより、台地近傍の沖積低地でも縄文時代晩期ごろに流域を埋積する堆積作用が生じていたことがわかる。また、志賀公園遺跡の地下層序の層相と比べると金屋遺跡では礫を主体とする粗粒な堆積物が卓越しており、河川の上流部の堆積相を示している。今回の調査により地表から深度 0.60m にかけて古代の遺物が出土したことから、少なくとも縄文時代晩期以降の粗粒な堆積物を運搬できるような水理学的に高エネルギーの環境から、古代よりも前に低エネルギー環境に移り変わり人為活動が行なわれたことがわかった。金屋遺跡のボーリングコア資料は、詳細の不明な庄内川・矢田川流域における沖積低地の地下層序を知るための貴重な情報となった。(鬼頭剛)

まとめと今後の課題

鬼頭報告にあるように、金屋遺跡の立地する沖積地は、縄文時代晩期以降かつ古代より以前までの埋積する堆積作用によって大きく形成されたことが明らかとなった。伊豆カワゴ平火山灰(Kg)が検出されたのは、地表からの深度

1.15m 以下の試料 7 からであり、図 4 で示した自然堆積層および遺物包含層は、いずれもそれ以降の所産ということになる。今回の金屋遺跡の調査では、古代の遺物がまとまって採取されているが、付近の沖積地の利用がいつの段階まで遡るのかが、もしも可能であれば今後究明すべき課題であろう。なお、当地が縄文時代晩期以降には粗粒な堆積物を運搬できるような水理学的に高エネルギーの環境であったとするならば、西約 3km の台地端に立地する牛牧遺跡の遺跡形成様相をも含めて、より広域な自然環境的景観を復元するための重要な一事象となると考えられるのである。(川添和暁)

謝辞

本稿を草するにあたり、名古屋市教育委員会文化財保護室の伊藤正人氏には、遺跡立会から本稿の掲載まで、多方面でご教示・便宜を賜った。また、調査するにあたり、土地を管理・所有している、服部和孝・ますみ・明日香諸氏には、幅広いご理解とご協力を賜った。また、村井みよ氏にも、開発前の周辺地域の様相についてご教示を賜った。ノイトラッツ建築設計の川島勝久氏には、地質調査結果の掲載などで便宜を図って頂いた。さらに、灰釉陶器の年代などについては、城ヶ谷和広氏にご教示賜った。株式会社古澤地質の古澤明氏には火山ガラスの抽出・測定および中部地方の降灰火山灰についてご教示いただいた。記して感謝を申し述べる次第である。

参考文献(鬼頭報告分のみ)

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
 鬼頭 剛, 2004, 庄内川低地, 志賀公園遺跡における堆積環境, 愛知県埋蔵文化財センター第 121 集「志賀公園遺跡 II」, 愛知県埋蔵文化財センター, 22-28.
 町田 洋・新井房夫, 1992, 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討・タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代-, 地質雑, 99, 787-798.
 西田四朗・高橋 豊・竹村恵二・石田志朗・前田保夫, 1993, 近畿地方へ東から飛んできた縄文後・晩期火山灰層, 第四紀研究, 32, 129-138.